入間市ヤングケアラー実態調査結果
〈概要版〉

1　調査の概要

⑴　調査の目的

潜在化しているヤングケアラーの存在及び実態を把握するため、ヤングケアラー実態調査を行う。併せて、ヤングケアラーが担っているケアの状況、悩みごと、支援ニーズ等を把握し、必要な施策に反映する。

⑵　調査対象

・市立小学校 16 校の 4 年生から 6 年生：3,502 人
・市立中学校 11 校及び私立中学校 1 校の 1 年生から 3 年生：3,808 人
・市内高等学校 4 校の 1 年生・2 年生：2,588 人
・小学 1 年生から 3 年生の担任及び小学校の養護教諭：129 人　　計 10,027 人

⑶　調査方法

・各自のタブレット端末またはスマートフォンにより Web アンケートを無記名で行った。
　※ヤングケアラーに関する動画を作成し、ケアとお手伝いの違いを説明してから調査を行った。
・調査票各設問の単純集計及びクロス集計を行い、実態調査結果に関する詳細な分析を行った。
・市内在住者のヤングケアラーと思われる高校生は 8 人と少数であったことから、高校生の調査結果は単純集計のみとし、クロス集計を用いた分析は行わないこととした。

⑷　調査期間

・小中学生：令和 3 年 7 月 7 日～7 月 16 日　※私立中学校の中学生は高校生と同時期に調査
・高　校　生：令和 3 年 7 月 7 日～7 月 31 日
・担任教員等：令和 3 年 7 月 7 日～7 月 16 日

⑸　回答状況

調査対象者	回答者数	回収率
小学 4～6 年生	2,480 人	70.8%
中学 1～3 年生	1,907 人	50.1%
高校1・2 年生	834 人	32.2%
小学 1～3 年生の担任・養護教諭	56 人	43.4%
合　計	5,277 人	52.6%

2 調査結果

ヤングケアラーの存在について

【小学生】

自分が「ヤングケアラー」だと思うかの問いに対し、回答者 2,480 人の内「はい」と回答したのは 105 人（4.2%）であった。

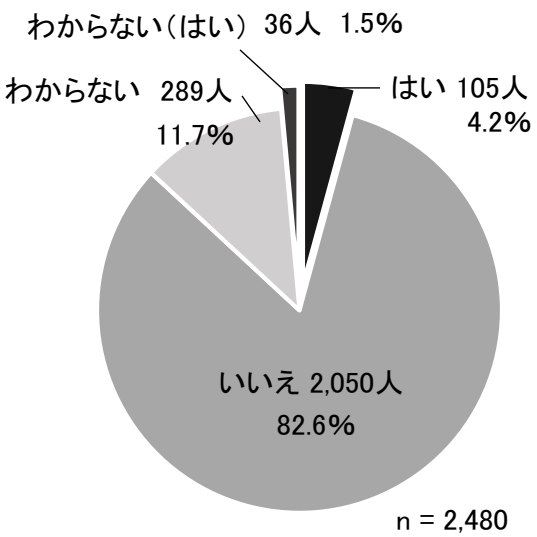
ヤングケアラーか「わからない」と回答したが、ケアの状況から「ヤングケアラーである」と判断した回答者を含めると、小学生のヤングケアラーは 141 人（5.7%）であった。

【中学生】

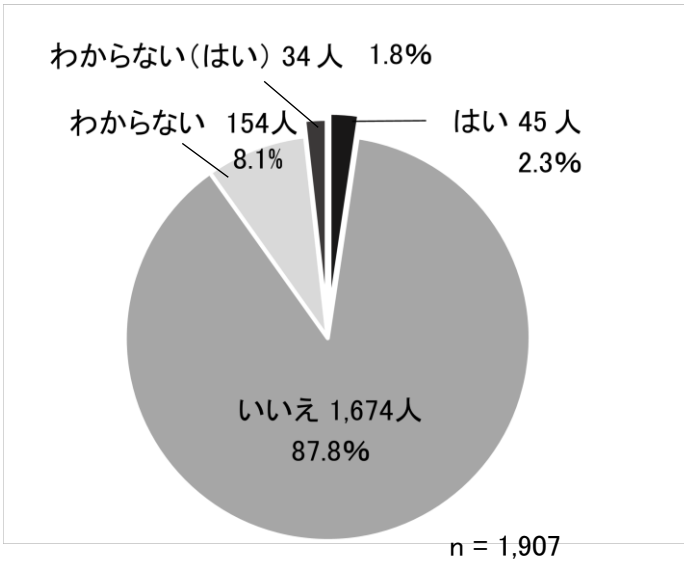
中学生の回答者 1,907 人の内「はい」と回答したのは 45 人（2.3）%であった。

「わからない」と回答した者の内、ケアの状況から「ヤングケアラーである」と判断した回答者を含めると、中学生のヤングケアラーは 79 人（4.1%）であった。

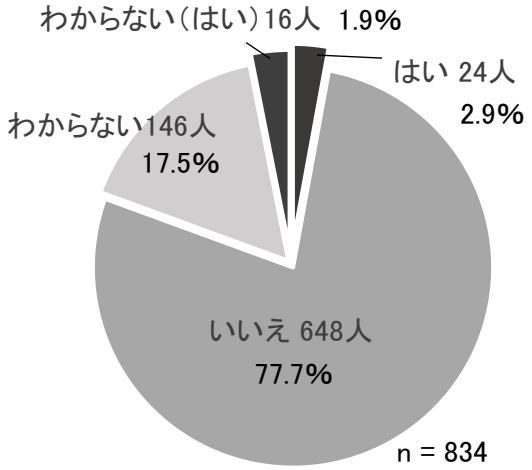
【小学生】



【中学生】



【高校生】



【高校生】

回答者 834 人の内「はい」と回答したのは 24 人（2.9）%であった。

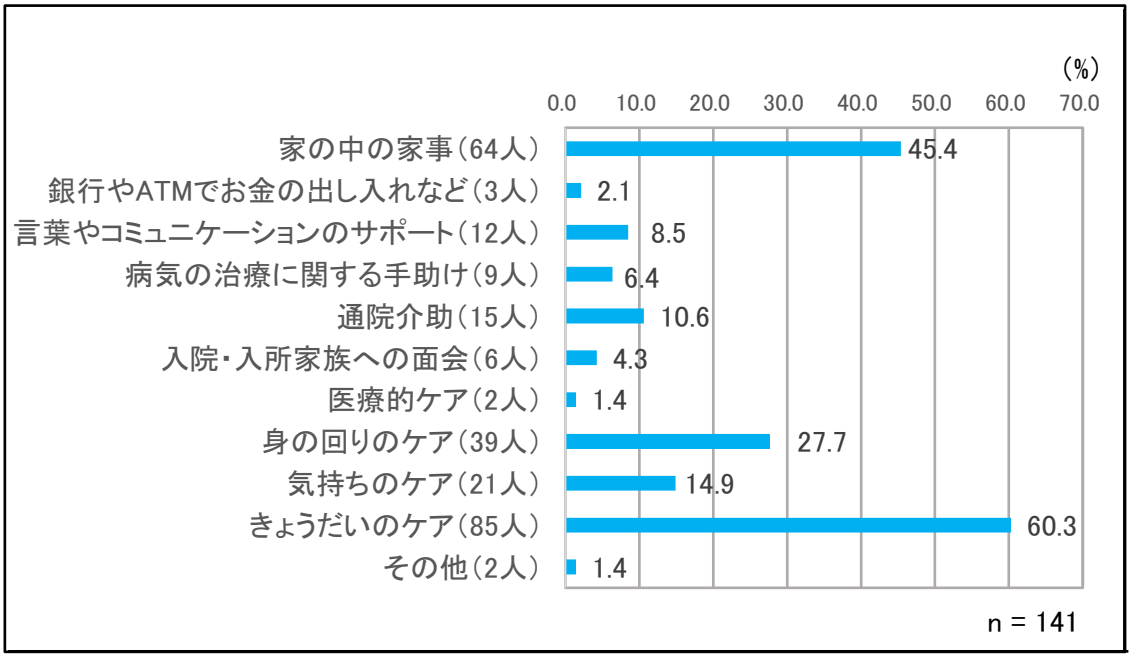
「わからない」と回答した者の内、「ヤングケアラーである」と判断した回答者を含めると高校生のヤングケアラーは 40 人（4.8%）で

※高校生の調査結果については、ヤングケアラーと思われる市内在住の高校生が 8 人と少数であったため、概要版には高校生のヤングケアラーの割合のみ掲載します。

ケアの内容　（複数回答）

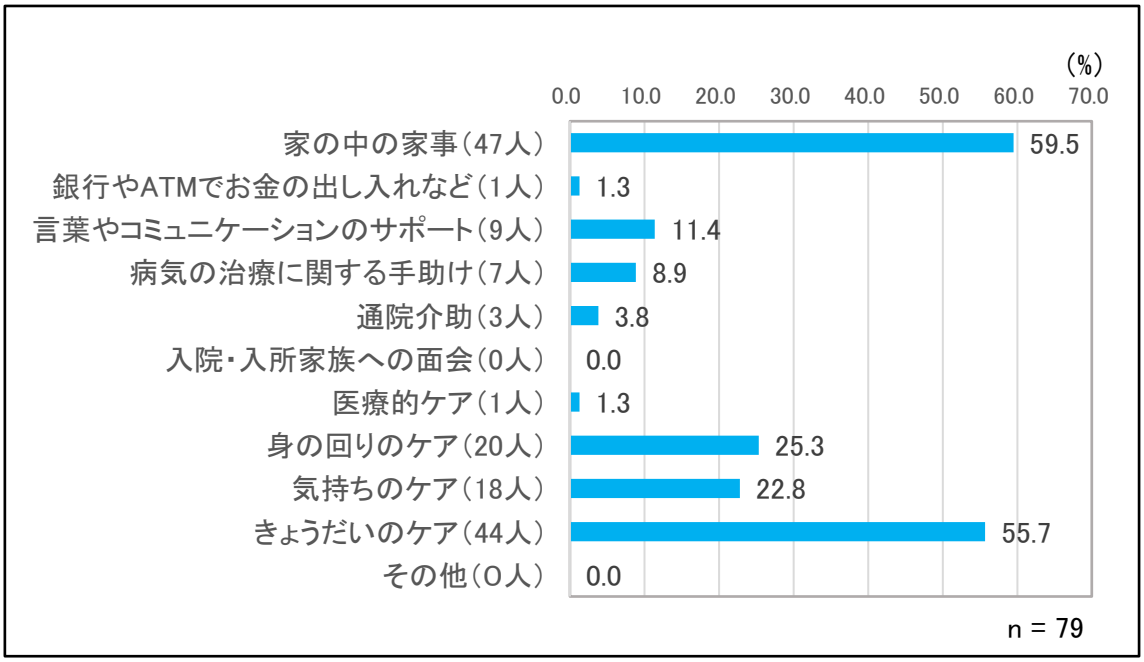
【小学生】

ケアの内容は、「（自分一人で、あるいは親と一緒に）きょうだいのケア」が 60.3%と最も高く、次いで「家の中の家事（食事の片付け、洗濯、掃除、買い物など）」45.4%、「身の回りのケア（衣服の脱ぎ着の手伝い、お風呂やトイレの手伝い、歩行の手助けなど）」27.7%の順であった。



【中学生】

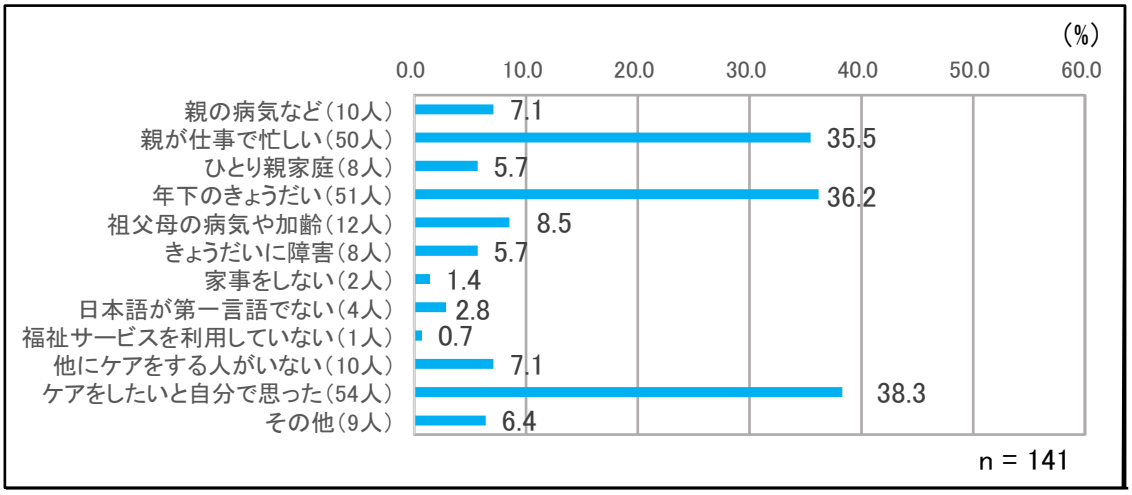
ケアの内容は、「家の中の家事」が 59.5%と最も高く、次いで「きょうだいのケア」55.7%、「身の回りのケア」25.3%の順であった。



ケアの理由　（複数回答）

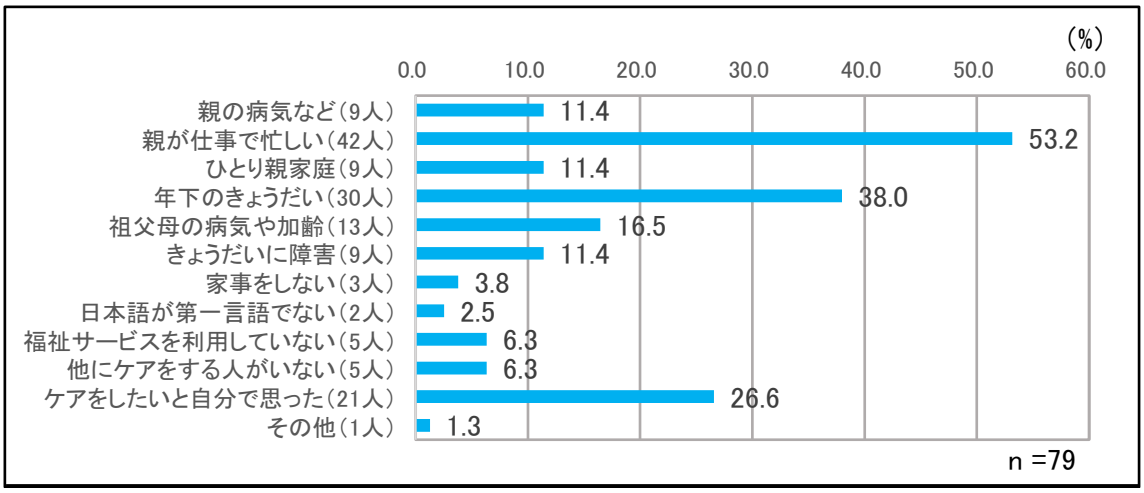
【小学生】

ケアの理由は、「ケアをしたいと自分で思った」が 38.3%と最も高く、次いで「年下のきょうだい」36.2%、「親が仕事で忙しい」35.5%の順であった。



【中学生】

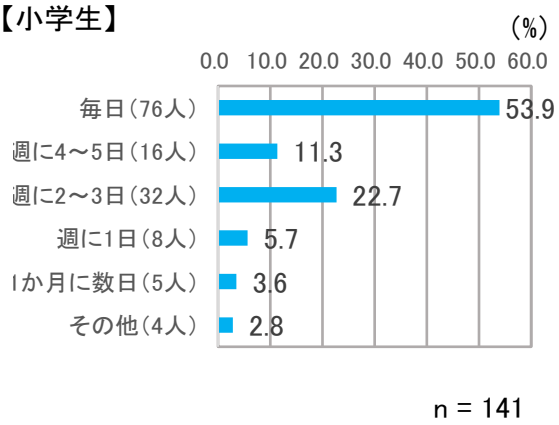
ケアの理由は、「親が仕事で忙しい」が 53.2%と最も高く、次いで「年下のきょうだい」38.0%、「ケアをしたいと自分で思った」26.6%の順であった。



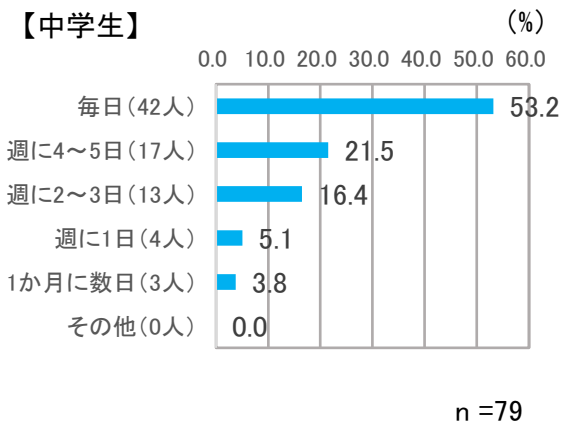
ケアの頻度

ケアを行っている頻度は、小学生、中学生とも「毎日」が最も高かった。

【小学生】



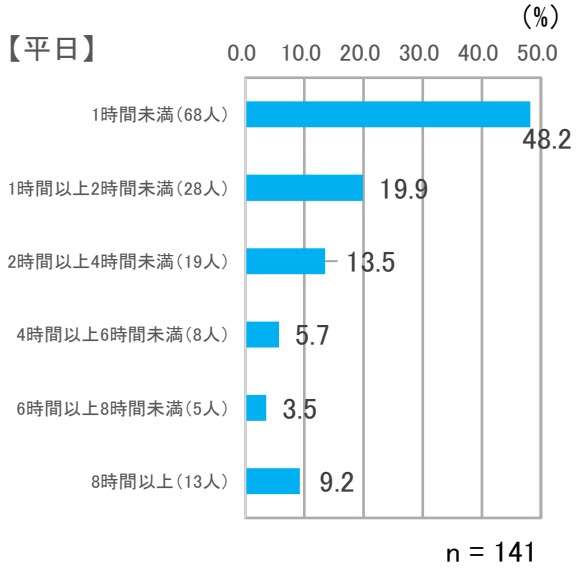
【中学生】

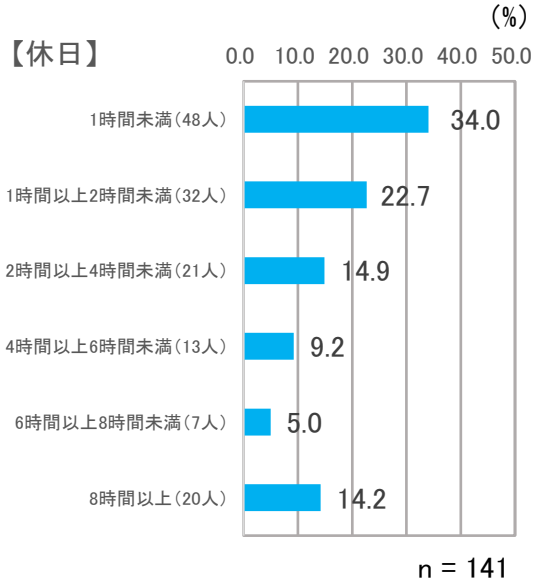


ケアに費やしている時間

【小学生】

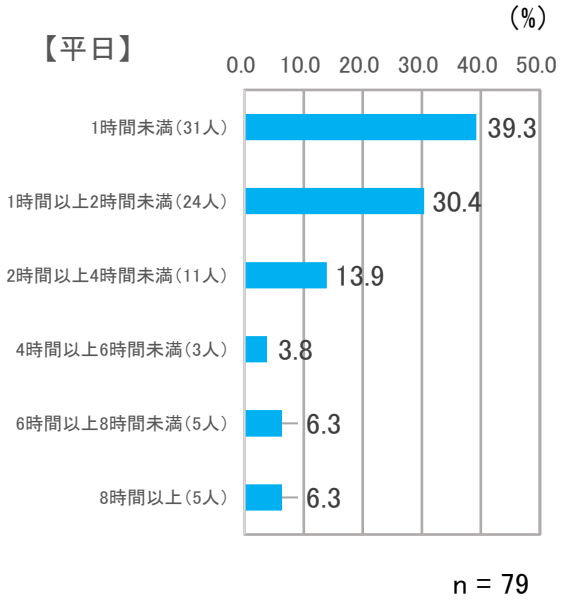
ケアに費やしている時間は、「1 時間未満」が平日・休日とも最も高く、次いで「1 時間以上 2 時間未満」、「2 時間以上 4 時間未満」の順であった。

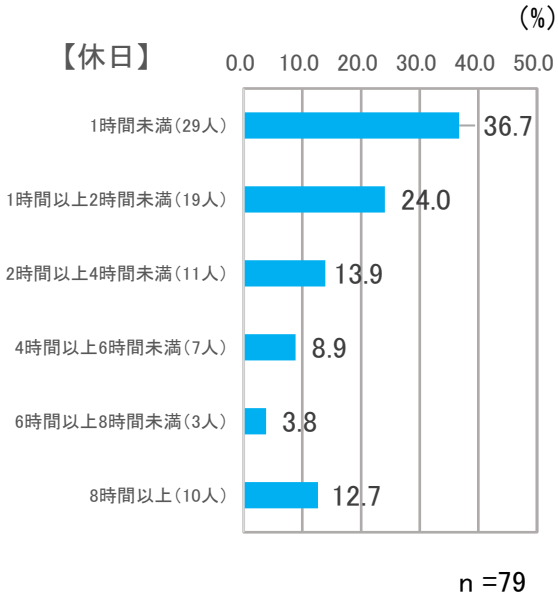




【中学生】

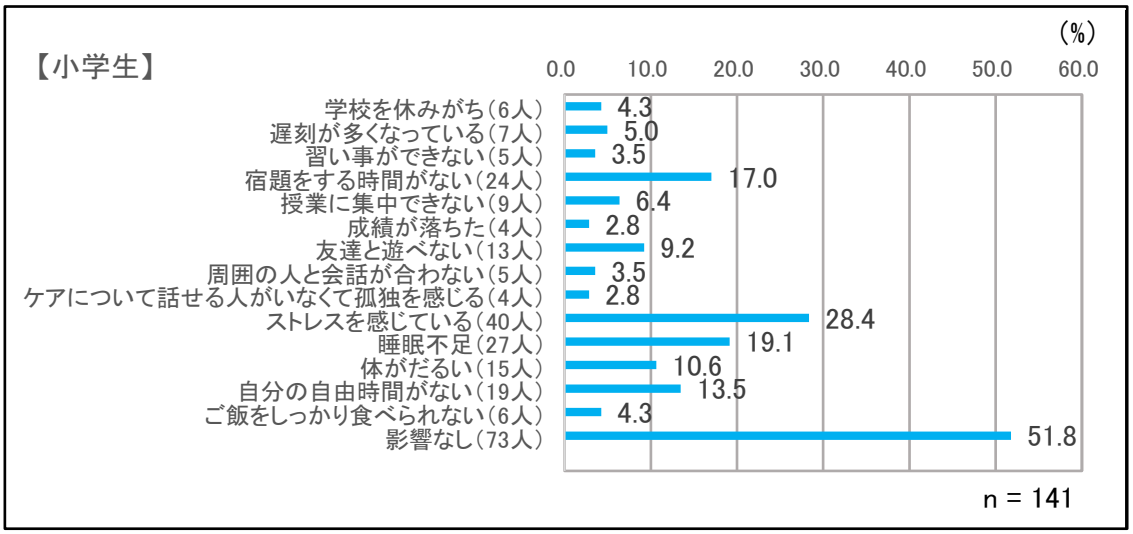
ケアに費やしている時間は、「1 時間未満」が平日・休日とも最も高く、次いで「1 時間以上 2 時間未満」、「2 時間以上 4 時間未満」の順であった。

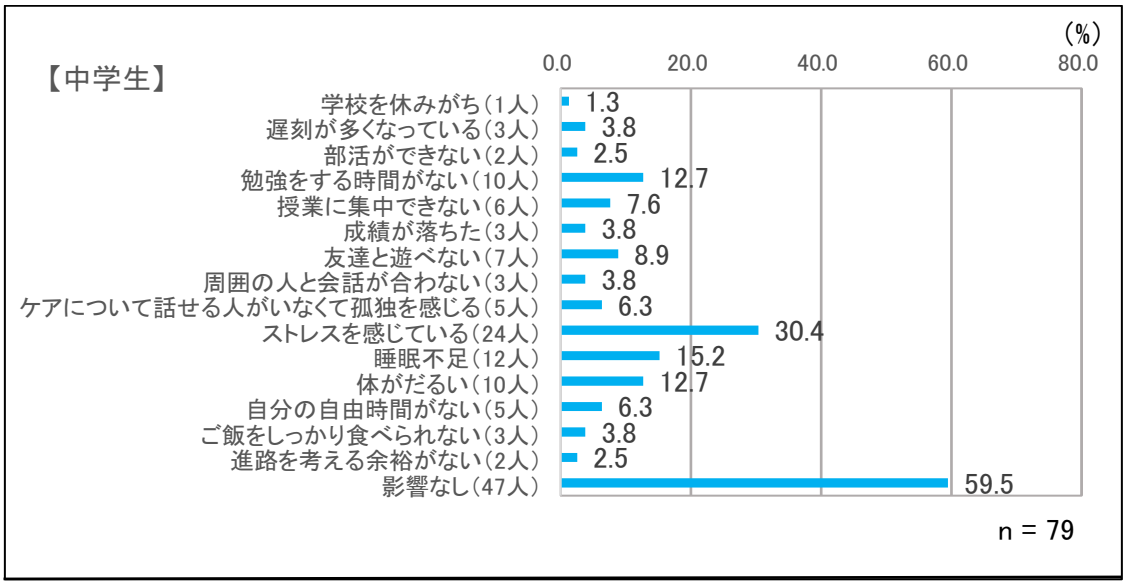




日常生活への影響　（複数回答）

ケアによる日常生活への影響については、小学生、中学生とも「影響なし」が最も高く、次いで「ストレスを感じている」であった。

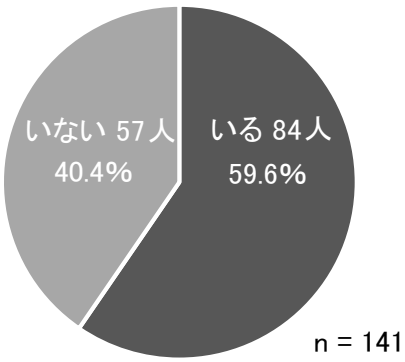




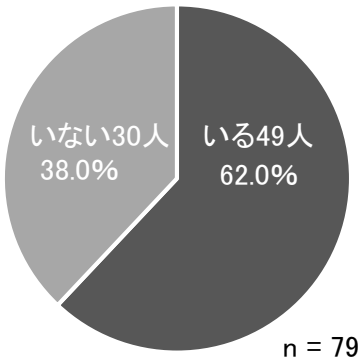
相談相手の有無

ケアについての悩みや不満を話せる人の有無は、「いる」と回答した者が多かった。相談相手は、一緒にケアを行っている「母親」が最も高く、次いで「父親」や「友達」など身近な人たちに相談していた。

【小学生】



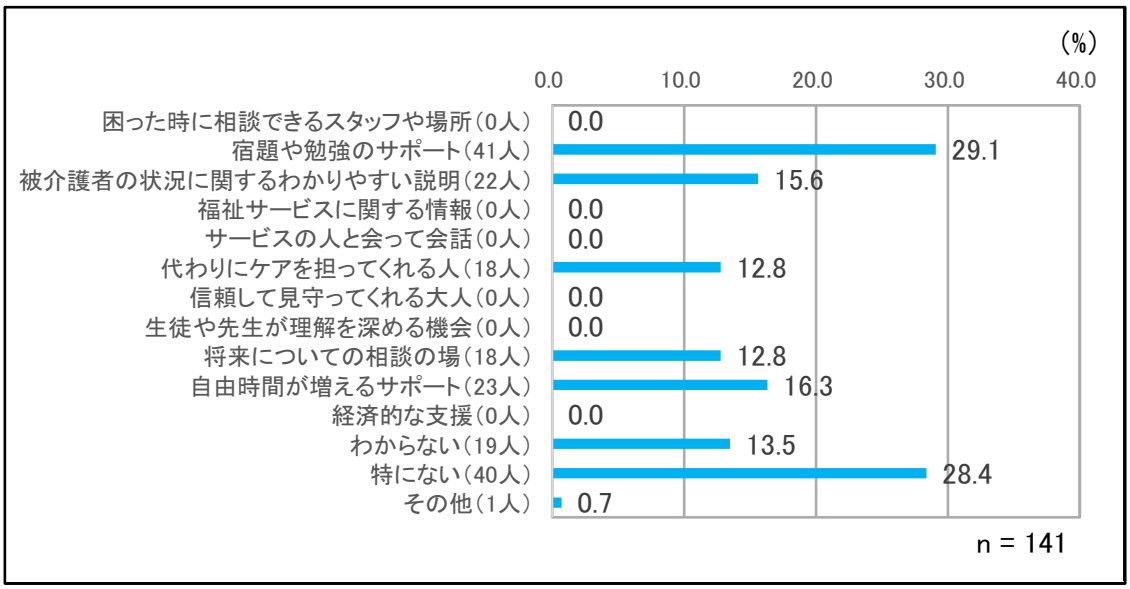
【中学生】



望むサポート　（複数回答）

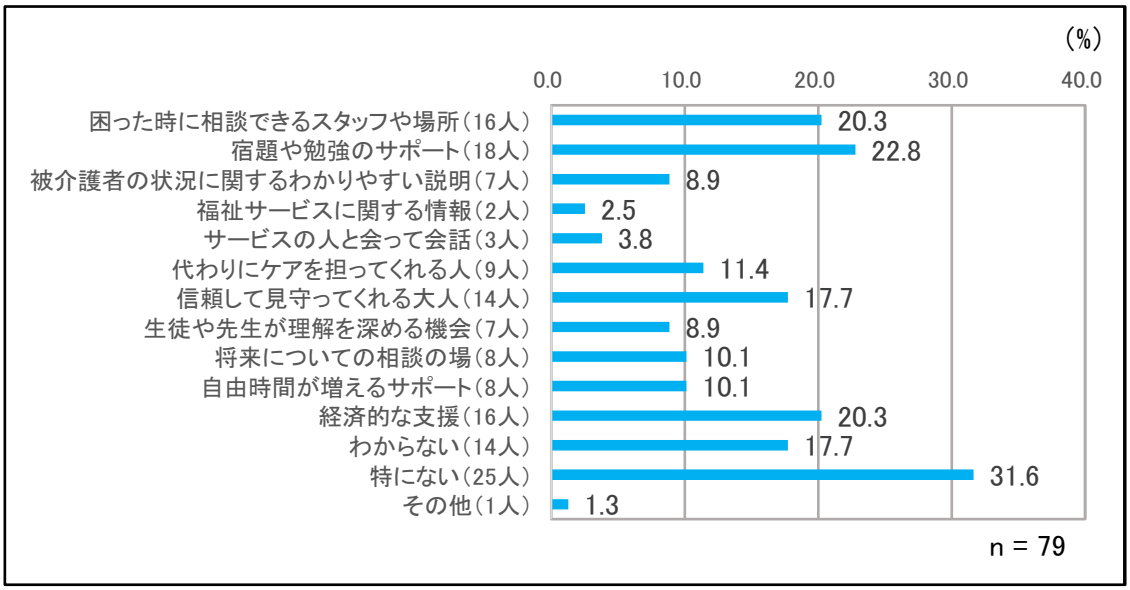
【小学生】

ケアに関して望むサポートは、「宿題や勉強のサポート」が 29.1%と最も高く、次いで「特にない」28.4%、「自由時間が増えるサポート」16.3%、「被介護者の状況に関するわかりやすい説明」15.6%の順であった。



【中学生】

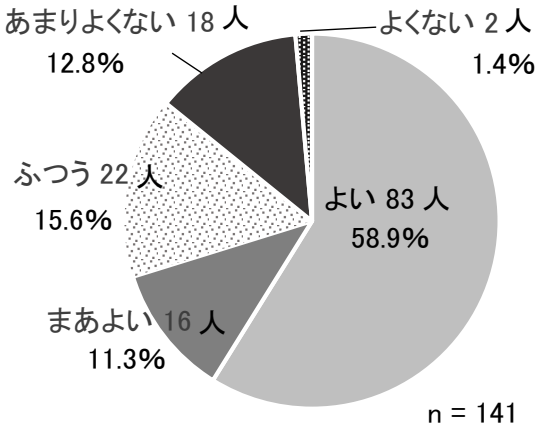
ケアに関して望むサポートは、「特にない」が 31.6%と最も高く、次いで「宿題や勉強のサポート」22.8%、「困った時に相談できるスタッフや場所」と「経済的な支援」20.3%の順であった。



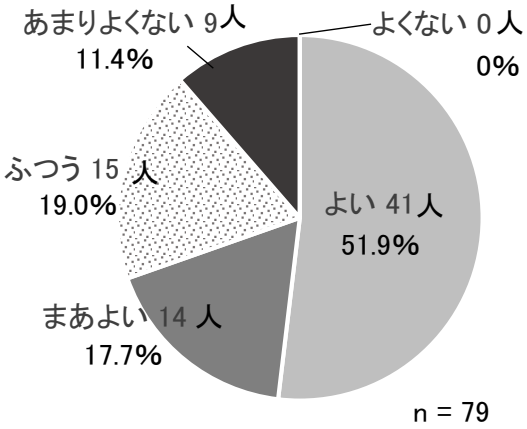
ヤングケアラーの健康状態

ケアの時間が長くなるにつれて、「あまりよくない」と回答するものが増える傾向がうかがえた。

【小学生】



【中学生】



自由記述

【小学生】

- ヤングケアラーについてよく知れて良かったです。
- 自分が、ヤングケアラーだと確信できました。妹、弟をお世話しているため、あまり睡眠がとれていないけれど家族もいっしょにやってくれるので、大丈夫だと思います。
- 私はヤングケアラーではないけれど、動画を見て、お手伝いとお世話には大きな違いがあることが分かりました。また、ヤングケアラーの方々はとても大変だと分かりました。
- ケアによって、「勉強ができない」や「学校に行けない」ということについて、そのような人に対しての支援が大切だと思いました。
- ケアしていることについて、あまり話さないことだから、スッキリしました。
- もしクラスにヤングケアラーがいたらその子の悩みなどを聞いて力になりたいです。

【中学生】

- ヤングケアラーという言葉を初めて聞きました。この言葉をもっといろいろな人に浸透させ、ヤングケアラーを理解してもらえるように、もっといろいろな場面でヤングケアラーについて考える時間が必要だと思います。
- ヤングケアラーだけがお世話や面倒を見るのではなく、地域や周りの人たちで協力しあってサポートしていけたらいいと思いました。
- 18 歳未満だとまだお世話をしてもらうくらいの歳なのに、家庭の事情でヤングケアラーの負担が少しでも少なくなる制度ができたらいいと思いました。
- 私みたいな人をヤングケアラーと言うのだと初めて知りました。
- 家族を大切に思うのはいいことだと思います。ですが、それと同じくらい自分も大切だと思います。この調査で少しでも救われる人が増えるといいと思います
- 耳が聞こえない家族のために通訳などを日々しています。小さいときからなので不満はないです。会話も手話でしていますが、特に支障はないです。楽しい日々です。

3 小学校教員・養護教諭

小学 1 年生から 3 年生におけるヤングケアラーの状況把握については、教員へのアンケート調査によって確認することとし、市内小学校 16 校の小学 1 年生から 3 年生の担任及び養護教諭に調査を行った。

教員のヤングケアラーの認知度

（人）

	知らなかった	聞いたことはあるが具体的に知らない	講習会に参加したことがある	ヤングケアラーの対応をしたことがある
小学 1 年生担任　（n＝11）	6	5	0	0
小学 2 年生担任　（n＝22）	7	15	0	0
小学 3 年生担任　（n＝17）	3	13	0	1
養護教諭　（n＝ 6）	5	0	0	1
合計 （割合）	21 （37.5%）	33 （58.9%）	0 （0%）	2 （3.6%）

ヤングケアラーの状況把握について

①ヤングケアラーと思われる児童（可能性も含めて）を把握している教員は、小学 2 年生の担任が 2 人、小学 3 年生の担任が 1 人、養護教諭が 1 人であった。

（人）

	いる	いない	わからない
小学 1 年生担任	0	9	2
小学 2 年生担任	2	15	5
小学 3 年生担任	1	10	6
養護教諭	1	1	4
合計	4	35	17

②学校が把握しているヤングケアラーと思われる児童が行っていると思われるケアは以下のとおりであった。

・幼いきょうだいのケア　・外出時の付き添い
・通訳や書類の説明　・家族の身の回りのケア

4 考察

○ヤングケアラーの存在について

当市のヤングケアラーの割合は、小学生（4 年生～6 年生）5.7%、中学生 4.1%、高校生（1・2 年生）4.8%であった。国、県の調査と概ね同様にケアラーが存在することが明らかになった。

○ケアの内容

ケアの内容については、小・中学生とも「きょうだいのケア」や「家の中の家事」「身の回りのケア」といった日常生活に直結したケアを行っている。

小学校から中学校へと進むにつれて、「言葉やコミュニケーションのサポート（家族のために通訳をする、手紙や書類などを説明する）」、「気持ちのケア（その人のそばにいる、元気づける、話をきく）」、「病気の治療に関する手助け（服薬の確認など）」が増加する傾向にある。

○ケアの理由

ケアの理由については、小学生は自分の意思でケアを行っていたが、中学生は仕事で忙しい親に代わり、必要に迫られてきょうだいの世話をしている状況がうかがえる。

○ケアに費やしている時間

小・中学生がケアに費やしている時間は、平日・休日とも「1 時間未満」が最も多かった。休日に長時間のケアを行っている傾向があった。

○日常生活への影響

ケアによる日常生活の影響については、小・中学生とも「影響なし」が最も多かった。一方、「ストレスを感じている」、「宿題・勉強をする時間がない」、「睡眠不足」などの影響をあげている児童もいる。

○相談相手の有無

相談相手の有無については、小・中学生とも 60%前後の児童が「いる」と回答しており、県の調査と同様の結果であった。

相談相手については、小・中学生とも「母親」が最も多く、次いで「父親」、「友達」等身近な人に相談している状況がうかがえる。一方、学校関係者や家族以外の大人を相談相手としている回答は少なかった。

○望むサポート

望むサポートについては、中学生は「特にない」が最も多く、小学生も「宿題・勉強のサポート」に次いで「特にない」が多かった。小学校から中学校へと進むにつれて、相談の場や見守ってくれる人を必要とし、何かサポートしてもらいたいというよりも、見守っていてくれることが重要なサポートになり得ると考えられる。自分自身の存在を認め、尊重してほしい気持ちの表れとも見ることができる。困ったときに相談できる場の整備、信頼して見守ってくれる人材の確保が必要である。

○小学校教員・養護教諭への調査について

今回のヤングケアラー実態調査では、教員の「ヤングケアラー」という言葉に対する認知度は低い割合であった。また、ヤングケアラーと思われる児童を把握している教員の数も決して多いとはいえない状況であった。今後は「ヤングケアラー」という言葉の周知や、ケアラーに対する理解や具体的な支援についての研修が必要かと思われる。

○自由意見

調査を通じ、「ヤングケアラーという言葉を初めて知った」、「アンケートの動画を見て理解することができた」という意見が多く見られ、一定程度、ヤングケアラーについて周知が図られたものと思われる。

5 今後の方向性

（1）周知・啓発について

ヤングケアラーの認知度は、まだまだ低く、周囲の大人のみならず子どもたち自身もヤングケアラーについて正しく理解することが重要である。研修会や広報等を通じて、ヤングケアラーについて周知・啓発し、全ての子どもが心身ともに健やかに成長できる環境整備を図る。

（2）相談体制の整備について

親子関係等の悩みに対し、子どもが相談しやすい窓口や場の設置について調査・検討し、相談体制の整備を図る。

（3）関係機関との連携

ヤングケアラーを早期に発見し適切な支援につなげていくため、教育機関、児童福祉、生活福祉、高齢者福祉、障害者福祉部局などの関係機関との連携を図る。

（4）条例制定について

社会全体でヤングケアラーを支援するため、支援の基本理念、市の責務、体制の整備等を定める条例の制定を目指す。